

式亭三馬赤本『桃太郎』試論

はじめに

式亭三馬は安永五年（一七七六）、江戸浅草田原町三丁目の家主、菊地茂兵衛の長男として誕生した。この父、茂兵衛が板木師として生計を立てていたことが、三馬が戯作者としての道を進むきっかけとなったのである。

戯作者として知られる三馬は、黄表紙や合巻を数多く出版してきた。その中で、文化九年に『黄表紙桃太郎』は出版された。「桃太郎」もこの変転を追究するにあたり、本作を触れずには考えられない。そして、本作からは挿絵や話の展開、どちらも三馬の戯作者としての意識が感じられる。桃太郎の誕生の仕方や力自慢の場面など、これ以前の「桃太郎」ものとは少し特異な作品である。

本稿では、戯作者として知られる三馬が、このような昔話ものを出版するに至った理由や、本作ならではの手法について明らかにする。また、挿絵についても論じることとする。

山崎 舞

一、概要

本作は、文化九年刊、式亭三馬作、歌川国丸画であり『伊達娘常陸小杉』との合巻作品である。このとき、数え年で三馬三八歳、国丸二〇歳である。合巻にしては、丁数が十五丁と少なく一般的な合巻と比較しても特異であるということがわかる。詳細な書誌についてだが、既に明らかにされているので、(一)ここで論じることはいらない。

まず、本作の梗概をまとめておきたい。

- ・桃が二つ流れてきて拾う。(一オ)
- ・流れてきた桃の一つを食べると、爺・婆は若やく。(一ウ・二オ)
- ・もう一つの桃から桃太郎が誕生する。(二ウ・三オ)
- ・その頃、鬼が島より鬼が出て、美しい女をさらう人々は恐れをなしていた。(三ウ・四オ)
- ・桃太郎は相撲をとり、力自慢をする。(四ウ・五オ)

・桃太郎は鬼が島での噂を聞き、鬼を皆殺しにして宝物を得ようと思ひ、きみ団子を拵えてもらう。(五ウ・六オ)

・鬼が島へ向かう途中で、犬・猿・雉をお供にする。(六ウ・七オ)

・鬼が島では家来が鬼に桃太郎のことを注進する。(七ウ・八オ)

・鬼が島の門を破り入る。(八ウ・九オ)

・犬・猿は鬼を討つ(九ウ・十オ)

・雉も鬼を討ち、桃太郎はさらわれた美女たちに助けてあげること告げる。(十ウ・十一オ)

・鬼が島の大王は、桃太郎に組み敷かれ眷属とともに命乞いする。

・桃太郎は大王に宝物を全て出させた上で、今後、人をさらわないことを誓言させて許す。(十一ウ・十二オ)

・桃太郎は多くの宝物を手にして、手車に乗つて帰る。(十二ウ・十三オ)

・一向は村に到着する。(十三ウ・十四オ)

・両親は喜び、猿・犬・雉には褒美が与えられ、さらわれた美女たちは家元へと届けられた。(十四ウ・十五オ)

・桃太郎は大分限となり、武士に取り立てられ幾万年も富栄えた。(十五ウ)

このように、桃が“二つ”流れてくるという点が、本作の特徴の一つである。そして、桃太郎の誕生場面の描かれ方は次のように整

理できる。

I、二つの桃が流れてきて拾う

大きな桃一つ流れきたりしゆえ取り上げて、半分食ひ残りの半分は爺とのおませうちて袂へ入れける。その所へ又一つ流れよるをも拾ひおきける。(一オ)

II、一つの桃を爺・婆が半分ずつ食べ返る

さて半分の桃を爺に食はせければ、いかなる桃にや爺も婆も此の桃を食ふとそのまま歳二〇歳ほどに若やぎて美しき夫婦となる(二ウ)

婆どのが昔ののぼつとりものになつた(二オ)

こちの爺さまは色男にならんしやした。(二オ)

III、米櫃に入れたもう一つの桃から桃太郎が生まれる

さて、かの桃の一つあるを米櫃に入れておきけるに、ある時取り出して見れば大きな桃となりて、その桃二つに割れてたる中より玉のような男の子とび出る。(二ウ)

二つの桃のうち、一つは食べたことよつて若返り、もう一つからは桃太郎が誕生することになっている。つまり、回春型と果生型の両型がともにみられる作品となっている。内ヶ崎有里子氏は「本書のように、回春型と果生型の両方をあわせもつ「桃太郎」作品は、

管見の限り本書以前のものには見られない⁽²⁾と指摘しており、本作は「桃太郎」ものの回春から果生への移り変わる作品であるということが考えられる。つまり、「桃太郎」作品の中間地点的作品であるのではないだろうか。なお、これ以降は後日譚が多く刊行されることとなり、以前の江戸期と明治期に刊行された「桃太郎」もの作品⁽³⁾調査においても両型をもち合わせた作品は本作以外には見られなかった。さらに、口承文学においても、このような作品は見られない。

桃が二つ流れてくるという話は、口承文学においてもいくつか見られるのだが、食べても若やぐという現象は見られない。そして持ち帰ったもう一つの桃から誕生するというかたちになっている。ゆえに読み物や口承文学といった数ある「桃太郎」ものの中で特異な作品であろう。

また、桃を米櫃に入れているのだが、一例として、広島県比婆郡における口承文学では、櫃に入れておくというものが見られ、他にも戸棚に入れておくというものも見られる。だが、米櫃に入れておくというのは、他では見られない。櫃ではなく米櫃に入れた意味とは何であろうか。米櫃の使われ方について確認してみたい。

櫃は古代から食物、衣類、武器などを収納する具を表し、唐櫃は食料品を貯蔵したり、あるいは収納して運搬する場合に常用され、この唐櫃から派生した米櫃も、とくに近世に入ってから貯蔵のもの

として普及し始めた⁽⁴⁾ことから、米櫃といえども米だけではなく食料品を貯蔵するものとして使われていたということである。つまり、ここで描かれている桃を保存しておくというのは、一般的に使われ方であったのだろう。

二、出版理由と昔話への関心

黄表紙や滑稽本によつてその地位を確立した三馬がこのような作品を出版した理由とはどのようなところからであろうか。その理由の一つを、『桃太郎』と同じ文化九年に出版された『花咲く』の序文からうかがうことができる。

① 赤本〇もゝ太郎〇花さきぢぢ〇鼠のよめ入都合三組を再板仕候て御幼少の御子様へいにしえのおもむきを奉入御覧たく且^且絵さうしの祖神とも申べきしなぐを世に絶さんもなげかしく彼は思ひあたり候に付作意を古調に補綴いたし絵は私所蔵の赤本黒本数ぐをとりあつめ、国丸子の筆をかりて、ひろひうつしに画かせ候上、当春再板仕候。猶追々舌切雀、かちくゝ山の類出版仕候。御幼少の御子様方御求御覧被下候は、赤本の祭祀をいたす同様と冥加至極難有仕合奉存候⁽⁵⁾『花咲く』

この序文からは、彼の昔話への関心の高さがうかがえる。自身が幼少期に読み、感じたものを後代にも伝えたいといったことから、出版に至ったのであろう。この序文によると、傍線部①にあるように『鼠のよめ入』も出版しているはずであるが、これについては現在のところ未詳である。また、『舌切雀』『かちく山』といった話も出版する予定であったのだから、実現できなかったのではないだろうか。

懐古趣味をも感じさせる序文であるが、本作以前にもそのようなことを感じさせるものが出版されている。それは『狂言綺語』や『劇場粋言幕の外』に見られることがわかる。さらに江戸から下つてきた狸が相談をもちかけられ、大磯に遊郭を設けて人間を化かすが、最後に市川白猿に捕られてさとし戒められるといった内容の『（7）腹轍躑躅曲』は三馬の懐古趣味を満足させただけの作とも指摘されている。

そして、昔話の類を幼少期に読んでいたことがわかるものとして、『（8）敵討宿六始』の序文がある。そこには次のように記されている。

②三馬いとけなき頃父の懐にいだかれ。夜毎に昔咄を聞に桃太郎かちく山舌切雀花咲ぢの類も。夫からくくの根問ひには咄の種も盡きてわが父金銅名大といふむかしがたりをし給

へり。余りの面白さに他のはなしを思はず。寝んとする時は必ず此物語を聞き。然りしより後は自から口ぐせとなりて。こんごと片言にうたひ。拍子取て踊りくるひしを思へば。二十四年の古へをしたはしく。今年の増補十冊の草紙につゞりて。我昔に同じき子供衆の談柄とはなしぬ（8）『（9）敵討宿六始』

このように、傍線部②から昔話に触れていたことがよくわかる。また、三馬の長編作品である『浮世風呂』女中湯之巻には「私どもの幼少な時分は鼠の嫁入や昔話の赤本がこの上なしてございました」とあり、ここからもその一端を考えることができる（10）。さらに、三馬と同じ戯作者である桜川慈悲成も『（11）寿五百八十七曲』を『（12）桃太郎』と『（13）花咲ぢ』が刊行された同じ年に出版している。いずれも角書から、赤本を意識していることが明らかである。したがって、赤本にて出版された話を戯作者たちによつて合巻形態で再板するということがおこなわれていたということが推測できる。このことについて、文人や作家の間で高まっていた考証趣味の影響ではないかという指摘もなされている（14）。つまり、昔話や赤本に関心があったということが以上のことから十分に考えられる。その上でなお考証という意志や態度がみられる。

三馬や慈悲成が関心を持った背景には、幼少期の思い以外に、これらが出版される前年に曲亭馬琴が『燕石雑誌』を刊行しているこ

とが少なからず影響しているのではなからうか。馬琴は『燕石雜志』の中で「猿蟹合戦」「桃太郎」「舌切雀」「兎大手柄」などの昔話もの考証をしている。そういったことが少なからず影響しているのである。そこから、昔話ものへの関心が高まっていったということが考えられる。

また、『燕石雜志』の「猿蟹合戦」の項では、赤本『猿蟹合戦』の一場面を模刻紹介しているのだが、そこには次のようなことが記されている。

③この余玉曆明和の間再刻するところの絵草紙、桃太郎、舌切雀、兎大手柄、花咲爺、浦島太郎等の数本あり。原是江戸大伝町書肆鱗形屋の蔵版なりしを、伯勞町なる書肆西村永寿堂うけ蔵めて今なほ年々に発行す。よりて奇とするに足さればもらしつ。⁽¹²⁾

この記述が示すのは宝曆、明和の頃に鱗形屋で版行したものが、現在西村屋にて刊行されているということである。つまり、改めて板元を移して版行しているということである。また、傍線部③にあるように再刻という記述が目につく。したがって、昔話ものの需要があつたということが考えられる。需要があるというこの点を利用して、三馬がこれまであまり触れてこなかった赤本、昔話ものというところに目をつけたのではないかと考えられる。馬琴のこのよう

な考証隨筆を出版したことが大きく影響を与えたのではないだろうか。

また、「浦島太郎」の後日譚である『^{註釋}其跡幕婆道成寺』や、「かちかち山」の後日譚で朋誠堂喜三二の『親敵打腹鼓』の復活を試みた『腹鼓狸忠信』をそれぞれ、寛政十年と文化六年に黄表紙と合巻体裁で出版しているのである。さらに文化五年には『^{註釋}玉藻前竜宮物語』を出版しており、これは浦島太郎や乙姫が登場させた話である。その内容は、浦島太郎をのせた万年龜と乙姫となった狐との問答、そして食意地の張った乙姫が様々な魚料理をさせるが、最後に七代目市川団十郎である海老蔵が登場してその化けの皮をはぐといった洒落滑稽の場面を書いたものである。⁽¹³⁾ 一般的な「浦島太郎」の話とは異なるが、登場人物は昔話ものからとっている。いずれも京伝や芝全工など他作品を下敷きにした作品となっている。また馬琴は文政七年に『童蒙赤本事始』を出版している。「桃太郎」や「舌切雀」、「かちかち山」、「猿蟹合戦」のないませを趣向としたものである。このような作品が出版されていることから、当時の戯作者界で昔話ものへの関心が持たれていたことがわかる。本作が描かれる前から、このような昔話に関連した話が出版されていたということは、決して無視できないことであろう。このようなことも三馬が昔話に関心をもったという理由であるといえる。

さらに、出版理由として、既に指摘した『鶴岡八景敵討宿六始』からわかるように、幼少期に昔話を読んで育ったということが考えられる。昔話の多くは赤本で刊行されているため、赤本を読んでいたということが判断できる。赤本が盛んに刊行された時期からは降るが、「父の懐にいだかれ」て読んでもらうなど何らかの形で触れていたことがわかる。それは赤本という範囲を広く捉えていたのではないかと考えられる。

回春型である「桃太郎」ものが大人向きのものであったということを踏まえると、より子ども向けへと近付いているのが本作であるといえる。ここには、三馬自身が子どもどきを読んでもらった際に感じたことが影響されているのではないだろうか。いかなれば、子ども向けへと近づけたのが三馬でないだろうか。子どもにはどのような描き方受け入れられ、面白いのかということをも三馬が考えていたということが考えられる。それゆえ、回春と果生が合わさった本作は、子どもと大人の両者を意識したものと解することができる。このような構造にすることによって、大人とともに読むことができる「桃太郎」というものを形成し、そこから、理想の「桃太郎」というものを作ったと考えられる。そこにこそ、戯作者としての三馬というものが表われているのでないだろうか。その点については、次節で詳述したい

三、三馬の「桃太郎」理想像と手法

先掲した『花咲ぢぢ』の序文からは、他にも本作の手法がうかがえる。まず、挿絵は三馬が所有している数々の赤本や黒本からとり集め、国丸の筆をかりて、描いているということである。つまり、三馬が国丸に指示をして描かせているということである。これまでに描かれた赤本、黒本を受けて描いたものが本作であるということだ。つまり、「赤本再興」としているが、赤本だけではなく、黒本も含み見ていたのである。

そして、本作の最終丁には「倣赤本文法 式亭三馬補綴、倣富川吟雪写意 浮世絵師歌川国丸筆」と記されており、ここからも、赤本に做ったことがうかがえる。挿絵も富川吟雪に做ったことが記されている。けれども、先述したように話の展開などは、戯作者式亭三馬というような作品になっており、あまり赤本に做ったようには見えない。さらに、挿絵も赤本の挿絵を多く描いた者ではなく、黒本・青本の挿絵を多く描いた富川吟雪に做っている。一方で、吟雪に做っているのだとするならば、桃太郎が誕生する場面は彼の絵をそのまま利用することもできたであろう。⁽¹⁴⁾ 最も、式亭三馬珍藏本といわれる「もゝ太郎」の絵柄を使うということが考えられたのではないだろうか。⁽¹⁵⁾ ゆえに、どのように赤本に做ったのかについては疑問

が残る。その点を解明するにあたって、赤本、黒本とは何かということに今一度立ち返ってみたい。

『草双紙事典』(二〇〇六年、東京堂出版)の解説では、赤本は享保年間頃かなり刊行され、寛延・宝暦頃から黒本・青本に移行したことが記されており、さらに江戸後期でも子ども向きの御伽物として受けとめられ、需要は続いたということが記されている。黒本については黒本・青本の制作期間は延享元年から安永三年までということになるが、実際は安永四年以降でも黒本・青本形態で多数刊行されていたことが記されている。ここから、刊行時期から降つても全くその形態がなくなるわけではなく、刊行はされていたことがわかる。

なお『⁽¹⁶⁾註釋 稗史億説年代記』では赤本について「赤本はじめて出来る。ひやうし一面のひやうだいに絵をかゝず、紙を黄色にそめる。赤紙の外題に白紙の表題をはる。此とき表題に絵を書入ることとはじまる」とあり、黒本は「黒表紙に青赤の外題をはりて黒本と称す」としており、三馬自身それぞれ区別をしている。だが、「赤本再興」を制作するために三馬が参考にしていたのは、既に確認したように赤本や黒本である。したがって、それぞれ時期や体裁などによって区別をしていながらも、広い範囲で赤本と位置づけたのではないだろうか。つまり、本作における「赤本再興」は黒本も含まれていた

ものだと考えられる。

また、内容についてであるが三馬自身の操作ではないかということも指摘されている。⁽¹⁷⁾この操作という点に関しては『燕石雑誌』にて馬琴が両型を書いていることを受けて、その二つを取り入れて組み合わせたということも考えられる。この後に刊行された十返舎一九作、歌川国貞画『昔噺桃太郎』は、回春型になっているが、楽亭西馬作、歌川国芳画『桃太郎一代記』は果生型となっており、次第に変化していったことが推測できる。⁽¹⁸⁾

大人とともに読むことができるものを作ったということを前節にて述べたが、子どものときの感覚といったものを大人になつてもう一度味わえるようなものを作ったのでないだろうか。つまり、大人から見ての面白みといったものを、読者に訴えろといったことをおこなったということである。それこそが、既に指摘のあるように二つの型をあわせもつということと結びつくのではないかといえる。二人が若やぐのと桃から誕生するという桃が二つの役割をするというところに面白みをおいたのであろう。つまり、三馬の操作の一つであるといえる。そこに戯作者としての三馬の姿勢が感じられる。子どものときの感覚を大人になつてもう一度表現したいといったことをおこない重層的なものを作ったと考えられる。子ども向けに定着するまでに、黄表紙期には後日譚やパロディものが増えた。

そして明治期には、誕生の仕方は違えども再び初期の頃のような話つまり原点に戻った。その間に位置する本作は、三馬の操作によってつくられ「桃太郎」ものの変転を考えるにあたって重要な作品である。

また、先に回春型を出し次の丁で果生型を出すことで、爺・婆が二〇歳ほどに若返った後に、桃太郎が誕生している。よって、桃太郎を育てられるほどの年齢になったということが考えられる。具体的に二〇歳ほどに若返ったということや、色男になったということ、そして、ぼつとり者になったということからもどの程度若返ったのかということがわかる。

そして、理想の「桃太郎」を作ったのではないかということ述べたが、本作の手法を考える上でも桃太郎像というのを考えてみたい。既出の内ヶ崎有里子氏による分類では以下のとおり五分類となっている。⁽¹⁹⁾

i、相撲が強い

村角力の大関などは一番もうつ事ならず、まことに桃太郎がり

きやうはやわざ、天狗も およぶまじと噂しけり。(四ウ)

ii、正義感の強い男

桃太郎、鬼が島の噂を聞き、にくき鬼が仕業かな、いざや、鬼が島へ渡りて鬼を皆殺しにして、宝物をとり来らんと(五ウ)

iii、家来に対する心配りが十分

みんな大義、大義、のぞみのものを持ってゆけ。(十五オ)

iv、尊敬される人物

鬼にさらはれたる女はそれぞれに家元へ届けつかわしければ、

桃太郎を神、仏のごとく、尊みて(十五オ)

v、裕福で武士に身をとり立てられる人物

鬼が島の大手柄より、十千万両の大々分限となり、その身も武士にとりたてられ、幾万々年も家富さかへける。(十五ウ)

ここより考えられることの二つ目としては、相撲が強いということが挙げられる。桃太郎が力自慢をする場面では、相撲をとっている(図1)。布袋室主人作、西村重長画『讀桃太郎物語』にも相撲をとり、勝つという場面は描かれているのだが、桃太郎が鬼が島へ渡った後に島の王となるためにおこなったものであり、力自慢をするためにとったものとは異なる。⁽²⁰⁾北尾政美画『桃太郎一代記』では、四斗俵を持ち上げて力自慢をし、さらにその延長のようなかたちで次の丁で相撲をとって村の百姓を打ち負かしている⁽²¹⁾。したがって、相撲のみで力自慢をするというのは、他の「桃太郎」作品には見られないだろう。また、昔話ものである『きんときおさなだち』にも相撲の場面が描かれている(図2)。ここでの場面は、金時は行司役であり相撲をとっているわけではない。そのため、ここからそ

のまま絵をとったということは考えにくいのだが、赤本であるため三馬の目に触れていたことは想像できる。しかし、力自慢をするのに『昔斬桃太郎』⁽²³⁾や『再板』のように石臼や石を持ち上げるなどといった単純なことではなく、相撲をとった理由とは何であったのだろうか。それを考えるにあたって相撲について検討してみたい。

日本における相撲にまつわる最古の記述として『古事記』の「出雲の国譲り」という話がある。葦原の中国を譲ってもらうために、建御雷神と建御名方神が力くらべで決めることとなったという話である。古くから力くらべとしておこなわれていたということ、そして重要なことを力くらべで決めていたということがわかる。このような神話ではなく、史実としての最古の相撲は『日本書紀』に三例見られる⁽²³⁾ということである。

江戸時代になると草相撲が盛んであった。もとは、神と精霊の争いを表したものであり、農村にとって重要な初秋の相撲は、神と精霊が争う原義が忘れられ、後には年占だけを考え、力くらべに興味が傾いた⁽²⁴⁾ことである。現在の草野球と同じように、民間で楽しむ相撲ということで、遊びとしての相撲である。観るというだけではなく、自らも参加できるということで、相撲が身近になったといえるのではないだろうか。さらに、それを証明するかのようになり、浄瑠璃や歌舞伎でも相撲物と呼ばれる作品が数多くある。浄瑠璃作

品である「昔米万石通」(享保一〇〇年)、これを元にした「双蝶々曲輪日記」(寛延二年)は浄瑠璃でも歌舞伎でも上演された。俳諧にも数多く相撲を題材にした作品がある。時代は遡るが、狂言にも見られる。このようなことから、相撲が民間に浸透しており遊ばれることもあったために、描いたのであろう。つまり、遊びを通して力自慢をしていたということである。

また、土俵に着目してみると、周囲は米俵のようなもので囲われている。現在の相撲と比較して、かなり大きいようにみえる。実際、江戸時代の相撲では五斗俵で境界を作っていたということであるから、このようなものが描かれることとなったのではないだろうか。

そして、鬼の悪さと力自慢というのはセットになっており、「桃太郎」ものにとつて力自慢をするというのは、伏線になっているといえる。ではなぜ、力が強いというのが「桃太郎」作品において好まれたのであろうか。それは、「桃太郎」ものにとつて鬼イコール悪というように描かれているということが関係しているのではないだろうか。その理由というのはここで出すことは難しいのだが、悪を征伐するためには必要不可欠な要素であったのであろう。

実は、この鬼を征伐するというのは、桃太郎像の二つ目である正義感の強い男ということも関係してくる。後日譚などを除き多くの「桃太郎」ものでは、鬼を退治していくという場面が見られ、「桃

太郎」話にとつては重要な要素の一つであろう。つまり、正義感の強い男というのは、「桃太郎」もの全体にとつての共通項であるのだ。

三つ目である家来のことを考えているという点は、楽亭西馬作、歌川国芳画『桃太郎一代記』でもみられるものとなっている。また、北尾政美画『桃太郎一代記』は家来ではないが、村の名主や年寄、若い者たちに宝物を披露し、馳走するという場面が描かれている。

四つ目である尊敬される人物というのは、他では見られない場面であると思われる。「神、仏のごとく尊みて」とあり、どれ程の尊敬の度合いであるかということが、うかがえる。

そして、最後の裕福で武士に身をとりに立てられる人物というのは、楽亭西馬作、歌川国芳画『桃太郎一代記』、北尾政美画『桃太郎一代記』にも似たようなことが描かれている。内ヶ崎氏はこの点に関して、皆から尊敬され富裕で武士に取り立てられることを幸福とする価値観をもっている人物としている。だが、そのような価値観をもっているかはこの場面だけでは判断できない。三馬が理想の桃太郎像を作ったということを考えると、相撲が強いという点と、尊敬される人物であるというのは、本作の特徴であり三馬ならではの桃太郎像であるということがいえよう。

四、三馬と挿絵師・国丸の関わり

歌川国丸が「桃太郎」ものの挿絵を描いたことは本作以外には管見の限り確認できない。国丸は、初代歌川豊国の門人であり、益亭三友『花鳥風月仇討話』（文化六年）の挿絵が初筆である。国丸が描いたものには美人画、浮絵、挿絵などがあり、挿絵を描いた作品としては、『吾嬬育露之荒事』『落咄機嫌上戸』『山洞流悪玉狂言』劇場仕入楓釣枝『敵討忍笠時代時絵』『敵討湊の曙』などがある。だが、『新桃太郎』と同年刊である『吾嬬育露之荒事』以外は本作以後に描かれたものである。そのため、文化六年の『花鳥風月仇討話』が初筆であったことを踏まえると、本作の挿絵は早い時期に描いたものである。

一例を挙げると、「浮絵江戸浅草観音之図」「新板江戸東叡山花見之図」といった絵はその前か同年に描かれている。したがって、三馬はこれらの絵と『花鳥風月仇討話』の挿絵を見て国丸を選んだのであろう。この『花鳥風月仇討話』には「桃太郎」ものを描くにあたって必要な絵が描かれている。その一つは、仇討ものということ、戦う場面が描かれていることである。「桃太郎」作品でも鬼と戦う場面が描かれているが、これは物語にとつて外せない絵である。もう一つは、爺・婆が描かれていることである。もちろんこれも

「桃太郎」作品にとつては、重要な絵である。『花鳥風月仇討話』に描かれている爺・婆の方が、しわが描かれており、より年が上であることがわかる。このように作品にとつて、必要不可欠な絵を描いているために若い絵師ではあるが、国丸を選んだのではないかと考えられる。

また、三馬と国丸が組んだ作品には『赤本桃太郎』、『赤本花咲ぢぢ』、『大草子武者修行鋭勇伝』が見られ、これらは全て同年に出版されたものである。そして国丸の初筆である『花鳥風月仇討話』で組んだ益亭三友とは、再び文化九年に『吾孀宵露之荒事』において組んでいる。他にも浮世喜楽や欣堂間人、為永春水などと組んで挿絵を描いている。

そして、『赤本三馬も』、『赤本稗史億億説年代記』にて挿絵を描いているように、自身も絵を描いていたため、絵をおさなりにしないといったことを考えていたのだろう。つまり、絵にもこだわったため国丸を画者として選んだということである。国丸の作風を見て選んだということがいえる。

本作の挿絵については相撲の場面で少し触れたが、他の丁における絵について見てみる。ここまで何度も触れてきたように、やはり赤本など他の作品からの影響というのは否めない。十ウに雉が鬼を討ち、鬼の首が虚空に上り火焰を吹く絵が描かれているのだが(図

3)、このような場面は『赤本らいこう山入』や『赤本大友真鳥』にも見られる。『赤本らいこう山入』十オでは火焰は吹いていないが、鬼の首が宙に上がっている絵が描かれている(図4)。また、『赤本大友真鳥』五ウは鬼の首ではないが、首が宙に上り火焰を吹く場面が描かれている(図5)。さらに、「切り取った鬼の首が宙を上り火焰を吹くという趣向は、赤本・黒本・青本「桃太郎」作品にはない」ということも指摘されている。⁽²⁵⁾つまり、本作ならではの絵と話の展開であるということがいえる。

そして、丁は前後するが、三オ、四ウに描かれている絵は「酒呑童子」ものに見受けられるということも指摘されている。⁽²⁶⁾したがって、このような他作品からの趣向を緬い交ぜした可能性が十分考えられる。先述したように、数々の赤本、黒本から取り集めていたのだが、「桃太郎」作品以外から絵を取り集めていたということが確認できる。また、『赤本花咲ぢぢ』も三馬の意図のもと描かれていたのだから、他作品からの影響というのは大いに考えられる。

おわりに

三馬は、『花咲ぢやん』の序文にあるように、赤本の趣きを伝えたいという思いから出版するに至った。しかし、桃太郎の誕生場面からもわかるように「桃太郎」もの全体から考えた際に、特異な作品であることがわかった。これ以前には、パロディもののような「桃太郎」ものが出版されたが、明治期には初期のような作品に戻っている。本作はその間に位置するため、決して無視はできない作品である。

そして、板木師の父や、数え年九歳から十七歳の秋まで板元である翫月堂に養われ奉公していたこともあり、出版物に対する思いや戯作者としての意識が強かったのかもしれない。このようなことから、幼い頃「父の懐にいだかれ」て読んでもらった作品を自ら出版し、伝えたかったのではないだろうか。桃太郎像においては、これらの意識が強く感じられる。桃が二つ流れてきたり、その桃を米櫃に入れておいたりと他の作品には見られない要素が多くある。

本稿では、戯作者としての三馬についても焦点を当てながら作品を考察してきた。話の筋だけでなく、草双紙において重要な挿絵にも着目しながら見てきた。しかし、国丸についてはもう少し考察する必要がある

だろう。三馬が国丸を絵師として選んだ理由については、あまり踏み込むことができなかった。したがって、ここで論じた以外の理由というものも考えられるであろう。昔話もの以外の作品における筋や絵にも着目しながら、紐解いていけたらと考えている。



図1

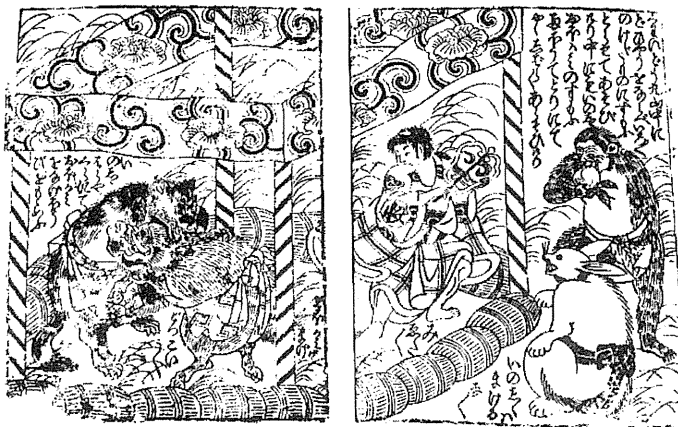


図2



図4



図3



図5

図1は内ヶ崎有里子『江戸期昔話絵本の研究と資料』(一九九九年、三弥井書店)、図2と図5は鈴木重三・木村八重子編『近世子ども絵本集』江戸篇(一九八五年、岩波書店)より

注

- (1) 内ヶ崎有里子『赤本再興 桃太郎』について『叢』一八（一九九六年五月、二二六～二二七頁）において、書誌について詳述されているため、そちらを「覽」いただきたい。
- (2) 注1に同じ。二五五頁。
- (3) 拙稿「昔話『桃太郎』の変転―『桃太郎昔語』の諸問題を中心に―」『玉藻』第五二号（二〇一八年三月、フェリス女学院大学国文学会）
- (4) 『日本大百科全書』「米櫃」の項
- (5) 国立国会図書館デジタルコレクション
- (6) 棚橋正博『式亭三馬集』（一九九二年三月、国書刊行会、三九二～三九三頁）は『狂言綺語』と『劇場粹言幕の外』について、「風来山人平賀源内の遺風を盛んに慕い、後ろ向きの懐古趣味を述べてやまない。」と指摘している。
- (7) 注6に同じ。三九六頁。
- (8) 古典叢書『式亭三馬集』第四卷（一九八九年一月、本邦書籍二八九頁）
- (9) 棚橋正博『式亭三馬』（二〇〇七年五月、ペリかん社、九頁）

の中でも『敵討宿六始』（文化五年刊）の序文を例に挙げ、三馬自身が幼少期に父の懐に抱かれて昔話を聞いていたことを指摘している。

- (10) 神保五彌校注『新編日本古典文学大系』『浮世風呂』（一九八八年六月、岩波書店、八九頁）
- (11) 木村八重子「赤本の世界」『近世子どもの絵本集』江戸篇（一九八五年七月、岩波書店、五一～九頁）
- (12) 日本随筆大成編集部編『日本随筆大成』第二期第一九卷『楓軒偶記 燕石雜志』（一九九五年三月、吉川弘文館、四三～九頁）
- (13) 本田康雄『式亭三馬の文芸』（一九七三年三月、笠間書院、一五八頁）による。
- (14) 注1に同じ。二五四～二五五頁は、富川吟雪の作品である『虚言八百根源記』を挙げ、そこには回春型の絵柄が描かれているため、それをそのまま利用することも可能であったということを示している。
- (15) 小池藤五郎「記録されたる桃太郎古説話の研究（上）」『国語と国文学』一一卷二号（一九三四年三月、至文堂、一七九頁）にて、もったろう（柱題）を式亭三馬珍藏本としている。
- (16) 三馬作画、享和二年刊。草双紙が赤本、黒本・青本と変わり当

世風の黄表紙に至るまでの変遷を絵と文で示したものの。当時の黄表紙の作者、画工、作品の評価を示している。

(17) 鈴木重三「江戸の昔話絵本素描『日本の子ども』の本歴史展 図録」(一九八六年八月、社団法人日本国際児童評議会、五三二頁)

は、「絵様は全千古拙の趣を模するものの、話の筋の紹介にはどうもかれの操作が入っているらしい。たとえば桃太郎の誕生など、爺婆が桃を食べて若やく回春型を出しながら、つぎの丁で桃太郎が桃を割って生まれる果生型へ転じている。異種作品の取り合わせか、三馬自身の操作か疑問が残る。」と指摘している。

(18) 内ヶ崎有里子『江戸期昔話絵本の研究と資料』(一九九九年二月、三弥井書店、七六～七七頁)において、合巻体裁絵本である「桃太郎」もの三作品『家桃太郎』家楽亭西馬作、歌川国芳画『桃太郎一代記』十辺舎一九作、歌川国貞画『昔噺桃太郎』の誕生の過程について考察している。

(19) 注18に同じ。七九～八〇頁。

(20) 滑川道夫『桃太郎像の変容』(一九八一年三月、東京書籍、三四頁)において『家桃太郎物語』の梗概を記している。

(21) 注18に同じ。資料編三八六～四一四頁

(22) 注18に同じ。八一頁、「桃太郎像」による。

(23) 土屋喜敬『相撲』(二〇一七年四月、法政大学出版社、一二頁)

は、皇極天皇元年七月二日、天武天皇十一年(六八二)七月三日、持統天皇九年(六九五)五月二日の三例に見られることを指摘している。

(24) 折口信夫「草相撲の話」『折口信夫全集』第一七巻(一九六七年三月、中央公論社)に詳しい。

(25) 注1に同じ。二五五六頁。

(26) 注1に同じ。「黒本・青本『新酒吞童子廓雛形』(画作者・刊年未詳 東洋文庫内岩崎文庫蔵)の二丁裏・二丁表に酒吞童子の眷属が島原の女郎を攫う場面が描かれているが、こういった絵柄と類似するのである。」とした上で、筋展開の上でも本書の趣向の一つであると指摘している。